2月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　素材生産協同組合　2月7日

素生協では先月の報告時よりも未選別の材が減っていたが「1月末の市では、もっと片付いていた。」との事だ。素生協の混乱は、売り払い済みの材の引き取りが遅れている為だけでは無さそうだ。ベテランの作業員が退職してしまい作業の遅れが顕著な様だ。事実グラップルの操作を見ていても、私でももどかしく思う場面があった。トレーラーの積み込みでも、2時間で積めていた所が4時間かかってしまうとの事だった。その結果、椪積する能力が低下し、能力の高い選別機が空回りしていると思われる。

私も現役時代に太い材を選別すると、すぐにゲートがいっぱいになって、椪積が間に合わなくなる。すると選別機を止め選別機のオペレーターもフォークリフトに乗り換えて椪積をした経験がある。

今回の売り払い物件数も 46 件と少ない。どうやらお家の事情は”上州産優良素材展示会”どころではない様だ。

今回の市で目立ったのは、富岡の永井製材が4.0mの中目材を多く買っている。居合わせた買い方に聞いてみると、桁材などは皆永井製材から買っているという。3.0mの柱材は素生協の隣の加工協同組合や県森連の渋川工場から量産されているが、柱材に特化した工場は4.0m材が挽けない。しかし桁や土台は4.0mなので、これも定番の材として必要である。そこである程度規模の大きな工場に生産を任せて、そこから買う方がコストが安くなる。近隣の製材所は、みな永井製材から買っているとの事であった。　自社工場ではその他の寸法の材を生産している。乾燥にも時間がかかるから、まとまった注文には便利なようだ。

それから、2.0mの安価な材を、白山製材とイトーチュ―が買っている。白山製材は主に土木用材を生産する工場で、元々高い材は買わない。しかしイトーチュ―が買っている材はバイオマス燃料向けの様だ。原木市場の動きが鈍い中で、市には出てこないがバイオマス燃料用の材は奪い合いになっているそうである。

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　2月15日

県森連の市では、3.0mの柱材の売れ残りが気になる。やはり大型の柱工場が消極的になっている様に見える。買い方の顔ぶれも、小規模工場で昔ながらの採材をする業者が見受けられる様になった。　原木の質に合わせて様々な製品を丁寧に製材する工場である。

今回出品された中に3.0mの大径木があった。材を見るとそれなりに目も詰まっていて、大節や腐れなどの欠陥は見えない材だ。こういった材を生かして使うのは、昔ながらの採材をする工場でないと出来ない。

だが、造材は完全に誤っている。　出荷者を聞くと「造園業者が伐採した材で廃材処理費を軽減するために持って来た物らしい」との事だった。他にも4.0mの大径木が出品され売れ残っているが、これらと比べても明らかに良材で、4.0m に伐ってあれば、あと2,000円/㎥は高く売れたと思われる。

3.0mの造材なので、おそらくこれも柱に挽かれると思う。但しこの太さで柱を採ると、４面柾目の柱が採れる。目も詰まっているので狂いも少なく、節も出ない。普通に乾燥しても干割れが出る事はないので、家の中でも独立して４面見える場所に使う”役物”と呼ばれる高級材だが、すでに需要は無くなっている。

その他合板用に造材された 2.0m のカラマツ・ヒノキ 4.0m のカラマツなどが時代に乗り遅れた姿で残っている。合板需要が起こる前は土木用の板材やパレット用材として消費されていた物だが、今これらは他の材料に置き換わっている。

買い方の話の中で、電気代の値上がりが話題になっていた。話をしていた工場では、「月間300,000円ほどの電気代が、500,000円を超える 様になった」との事だった。ただ「電気代の値上がりが始まったのがウッドショックが収まった後で良かった。」とも言っていた。工場がフル回転している時に、電気代が上がったのではたまらなかった。と言う事なのか？つまり今は工場の稼働率を抑えていると言う事か？

いずれにしても、世界情勢の不安定さに端を発し、円安にブレーキをかけるべく行った日銀の金融緩和政策は住宅ローンの値上がりを招き、外材流入も促進してしまった。　木材業界には”百害あって一利無し”の状態で、また出口の見えないトンネルに入ってしまった様だ。